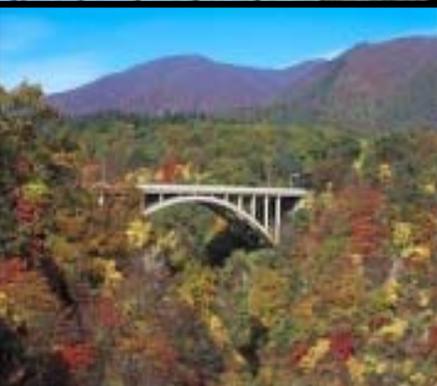


鳴子ダム水源地域ビジョン
第3回策定委員会資料

平成17年5月31日（火）

資料 - 5 「地域活性化」のとりまとめ



地域活性化事例(温泉地活性化事例 : その1)

山代温泉(石川県加賀市)

- ・全国的な観光不況の影響を受け、2000年には約6割まで観光客が減少
- ・行政が地域に必要なものを把握し、効果的な支援政策を実施
- ・温泉旅館内にギャラリーや土産物屋などの観光客のための施設を設置
- ・温泉旅館と商店街が協働で、観光客がまちなかを回遊できるための取り組みを実施

《取り組み内容》

宿泊客以外でも利用可能な温泉施設の増改築

遊休施設のレストラン、ギャラリー等への転換

市内観光周遊バスの運行

廃業した旅館跡地を活用した高齢者と若者の世代交流の場、NPOの設立

旅館の囲みこみを止め、地元商店街と観光客との交流の仕組みづくり(山代温泉の様々な案内が受けられる「道番屋」看板を協賛店舗、温泉旅館等に設置)

《今後の課題》

宿泊産業としての認識が高く、また、旅館によってはいまだに観光客の囲み込みを行うところも あり足並みを揃えられるかが課題

山代温泉の地元主導で企画を発案し、自治体が裏方に回って支援するという形がうまく軌道にのせる必要がある

今後は、いかに新しい企画を発案し、アプローチしていくかが課題

浅間温泉(長野県松本市)

- ・バブル期の過大投資による経営悪化・高速交通網整備による通過地点化
- ・逆境をバネに従来型温泉観光地を脱却し、高齢化への対応と湯治場への回帰に活路を求める
- ・廃業した旅館をケア施設として再生
- ・80年代初めから障害者共同作業所や市内ボランティア組織化に取り組んでいた住職の存在(キーパーソンの存在)

《取り組み内容》

廃業温泉旅館の小規模通所デイサービス施設への転換

日帰り、宿泊可能な湯治場の整備、ケアする人のケア施設

居宅介護支援ヘルパーステーション、在宅介護、在宅入浴サービスの展開

《今後の課題》

宅老所から活老所への発展

高齢者も障害者も地域の人々との交流できる環境づくり

1 . 生活型観光地の実現

旅館、ホテルの観光客の囲み込みの廃止

農業、商業、伝統工芸、自然環境との共生

暮らしのまち、生活型観光地の実践

地域の人々が地域を知り、地域の人々が快適であれば観光客も快適

2 . 温泉のゆたかさの再認識

自然を生かした温泉保養地の再認識

社会と共に「歓楽」から「健康」「福祉」へ

旅館、ホテルの「温泉保養地」から町全体の「保養温泉地」へ

3 . 景観を守る

農村風景の保存、町並み保存

まちづくり条例や建築・環境デザインガイドブックなどで地域づくり

地域住民と来訪者の協同による環境保全のための基金の活用

4 . 地域住民と行政が共に築くまちづくり

地域と共に潜在的な長期滞在需要に対応したまちづくりの構築

ホテル、旅館の地域住民と行政とが連携を図り新しい

5 . ナンバーワンよりオンリーワン

地域の個性を活かし地域独自のスタイルを構築

あらゆるジャンルからの地域の活性化を実現

民間の研究会が力をあわせた『十勝農村ホリデーネット』(北海道十勝広域)

生産から加工サービスへと農業の高付加価値化に向け、副業としての農業体験や搾乳体験など、各地域各農家の実状によって様々な取り組みが行われた。

市町村で民間ベースの研究会を作り独自にマーケティング、セミナー実施などの活動を行ってきたが、さらに発展させようと、広域的な連絡体制を作ったものが「十勝農村ホリデーネット」である。現在では広域的な情報発信による集客推進、各農家間での情報交換によるレベルアップ等を積極的に進めている。

温泉湧出による交流施設「湯ら里」開設と千葉県柏市との積極的交流(福島県只見町)

只見町は、ブナ林に代表される豊富な森林と第1回認定の全国34ヶ所「水の郷」の一つに選ばれるほどの水資源に恵まれている。

これらを活かしたグリーン・ツーリズムへの取り組みを開始し、地域と都市住民との交流による活性化を図る。

千葉県柏市との「ふるさと交流」では、柏市駅前に特産品販売をする「フロックス」をオープン。町民の湯治場的機能と交流促進に向けた宿泊機能を併せ持つ交流促進センター「季の郷 湯ら里(ときのさとゆらり)」を整備。日本生協連「グリーンライフ事業」と提携。

農家民宿がグリーン・ツーリズムを推進(長野県大鹿村)

大鹿村のありのままの生活を体験してもらう「お母さんの山村留学」に取り組んだ。

こうした活動を通じて、農家が都会の人に宿泊・体験を提供するといったグリーン・ツーリズムの考え方が浸透し、実践されてきた。

平成9年度からは、新たな出発として、7戸の農家が正式に宿泊業としての許可をとり、本格的な農家民宿に取り組んでいる。

名水が育む都市住民と地域のふれあい(三重県宮川村)

これまで河やホテル等、地域資源を活かしたイベントを年間多数行い、こうしたイベントを通して交流人口の増加を図ってきた。平成9年には、ホテル、温泉、体験工房などからなる「奥伊勢フォレストピア」を整備し交流機能をさらに充実を図っている。

奥伊勢フォレストピア内の「森の国体験工房」では「パン作り体験」「コンニャク作り体験」「リース作りと木工体験」「アマゴ、マス釣り体験」それに「体験農園」が行われているが、支えるのは「いきいき夢倶楽部」という地元の住民組織である。

ここで地域住民の交流と生き甲斐を求めながら、事業としてもとらえ、独立採算で経営。

「奥伊勢フォレストピア」内にはホテル・宮川山荘、温泉、わんぱく広場もあり、総合的な滞在型リゾート+体験工房を実現している。

つまものパック商品「彩」のヒットと「1Q(いっきゅう)」運動(徳島県上勝町)

上勝町は「いっきゅうと彩の里づくり」を活動テーマに町づくりを展開している。

多品種農産物生産戦略に端を発し生まれたのが「彩(いろどり)」で、もみじなど日本料理の季節感を彩るためのつまものを1パック平均200円でパッケージ化したこのユニークな商品は、阪神市場を中心に売上を伸ばした。

今まで市場が敬遠していた足の長い椎茸を逆手にとり「足までおいしいたけ」とネーミングをすることによって、他の産地の椎茸と差別化をはかり成功した。こうして成功した「彩」や「菌床椎茸」などの商品群は、都市との交流人口の増加だけでなく「地域視察型観光」という相乗効果をも生み出している。

湯の町湯布院の広域ネットワーク活動を利用した取り組み(大分県湯布院町)

布院町は自然と観光業の陰に隠れがちな農業の活性化を図るためにグリーン・ツーリズムの手法に基づいた幾つかの町づくりの活動を行ってきた。

「第1回農村アメニティコンクール」において最優秀賞を受賞し、その後「潤いのある町づくり条例」を制定。自然環境の保全と、それを活かした健康づくりのためのゆとりある町づくりを推進している。

「グリーン・トライアングル」は、大分県大山町、熊本県小国町と提携して始めた共同シンクタンク組織であり、広域ネットワーク活動を通じて情報交換、業務提携を行いグリーン・ツーリズムへ取り組むための組織である。

1997年4月には、都会と農村の交流を目指すための中核施設「湯布院ハーベストファーム」をオープン。農業と観光が共存する新しいモデルとして地元農業活性化につなげることが期待されている。